

このたびも我を忘れぬものならばうちみんたびに思ひ出なん

〔玉海〕治承四年六月廿三日甲辰、此日密々有嫁娶事、略中 召贄殿打火、燃付塗籠中燈爐、禮用脂燭火、今度無此儀、

仍以略儀
用打火

〔雍州府志^六土產〕燧石 處々出、然鞍馬山之產爲堪發火、鞍馬松尾東山腹造小堂、一人居其内、著長繩於蕒、有往來之人、則卸是蕒於往來之路頭、有求燧石、則多少隨其心入錢於蕒内、於茲提舉、芻蕒應其錢之多少、而盛燧石於蕒内、再卸之、買者取得之而歸、是謂鞍馬蕒下、凡鞍馬山下土豪、多剃髮、故謂鞍馬坊主、倭俗謂僧稱坊主、其餘亦剃髮者、總謂坊主、卸斯蕒者、土豪坊主中二三家主、斯事、或又賣市中、

〔雍州府志^七土產〕喞 俱都和所々製之、然大佛門前明珍所作爲良、又攝津國譽田一口所作、亦好倭俗造喞、謂磨製喞家、又作燧、能鑽火、

〔雲根志 前編二〕火打石

火打石は名産多し、國々諸山、或は大河等にあり、色形一ならず、山城國鞍馬にあるは色青し、美濃國養老瀧の産同じ、此二品甚だよし、伊賀國種生の庄に膏藥石あり、色甚だ黒し、兼好法師が住居せし時に、靜弁が筑紫へまかりしに、火うちを贈ると書る是也、阿波國より出るはこれに次、筑後火川、近江狼川は下品也、水晶石英の類も、よく火を出せども、石性やはらかにして、永く用ひがたし、加賀或は常陸の水戸、奥州津輕等の馬腦大によし、駿河の火打坂にも上品あり、共に本草の玉火石の類なるべし、

〔雲根志 三編二〕燧石

火打石、伊賀國名張郡上三谷奥田といふ所にあり、俗奥田石といふ、色黒く堅し、同村に小谷石といふあり、同品なり、又長坂村にあり、道久保石といふ、色薄白く筋あり、又阿波郡内保村にあり、色